

文化振興ビジョンを推進するための懇話会 第4回会議概要

1 日 時：平成24年11月5日（木） 13：00～15：00

2 場 所：松永記念館 本館2階和室（小田原市板橋941-1）

3 出席者

(1) 委員（8名）

畠山座長、鬼木副座長、石田委員、大澤委員、神馬委員、露木委員、深野委員、
間瀬委員

(2) 行政（6名）

諸星文化部長、瀬戸管理監、中津川文化政策課長、福井文化政策係長、高瀬芸術
文化創造係長、田中主事

4 傍聴者 2名

5 会議の概要

(1) 第3回会議のふりかえり

第3回会議概要から主要な意見を抜粋して、前回会議をふりかえる。

(2) 推進体制について まとめ案

これまでの会議で話し合われた議題、出された意見等をもとに、作成したまとめ案を事務局より説明した。提示したまとめ案は決定ではなく4回、5回の会議を経て今年度のまとめとするとした上で、意見を求めた。

【鬼木副座長】

- ・（確認だが）市民ホールについて、現時点で運営体制が未定なのは、全くの白紙ということか、それとも方向性はあるのか。

【事務局】

- ・具体的に言うと白紙ではない。市民や専門家とともに管理運営計画委員会を開催している中で、行政がこの場で勝手に言う事はできないが、期限的に新規財団の立ち上げは困難と考えている。民間の指定管理者制度の導入も難しいという認識があり、運営組織は直営か既存財団を考えている。

【深野委員】

- ・直営というのは、今の市民会館と基本的に変わらないのか。

【事務局】

- ・変わらない。市が小田原市事業協会に委託する形を取る。現在、事業協会では貸館業務や駐車場運営を委託しているが、将来的には公益財団化を目指しており、小田原駅東口の再開発の事業主体として、整備・運営の参画を目指している。

【鬼木副座長】

- ・運営組織が決まっていないという前提でビジョンの中で市民ホールが果たす役割は大きく、中心的に牽引する役割にあるといえる中で、(1)芸術文化創造拠点併設型と(2)プラットフォーム型に分けているが、この2つは同じものになると思う。
- ・プラットフォームの中の1つが市民ホールという形。
- ・懇話会からも、「市民検討委員会にビジョンの中での役割を意識してほしい」、といったメッセージを出したほうがいいのではないかと、思う。

【深野委員】

- ・現在、事業協会は無尽蔵プロジェクトや文化連盟とのつながり（つまりプラットフォームの結節点）となるような活動をしていたり、または今後やる可能性があるのか。

【事務局】

- ・今は、施設管理を受託しているだけで、プラットフォームという形ではやっていない。

【大澤委員】

- ・市民ホールは、自主事業をやるという方針は持っているのか。また、それを推進するのは直営か、それとも既存の団体のどちらかになるのか。

【事務局】

- ・自主事業をやる方針はある。また、指定管理者制度導入の可能性も全くないわけではない。

【間瀬委員】

- ・2階建て（ハイブリッド方式）にはしたくない。やるならば市民ホールの管理運営と事業を一体的にやるべきである。
- ・市民ホール基本計画の中では、創造発信型のホールにするという構想があるが、事業を実施するための組織をどう作るかが問題であり、それを既存の団体か市の直営かまたは公募でやるのかはまだ見えていない。

【大澤委員】

- ・直営のイメージが古い意味のものだと期待はできない。専門職員を公務員として雇用し、優秀なら契約更新をしていく。組織が裁量権を職員に委ね、古い意味で管理をするだけの直営ではなく、文化振興を担うための、また行政が責任を持つ組織という意味の直営であってほしい。

【事務局】

- ・市民ホールの管理運営計画委員会の中で議論している直営は、指摘された意味での直営と考えてもらってよい。

【大澤委員】

- ・その意味での直営ならば、運営組織と開館までのタイミングを考えると、開館後にホールを運営していく準備組織の中にビジョンを推進していくプラットフォームの事務局が置かれているというのは違和感がないが、そうであればホールが完成するよりも前（完成の2年くらい前まで）には運営組織を作ってプレ事業をやるのがよい。
- ・運営組織は市民ホールのためのものであるが、ホールがまだできていないのであれば文化振興のための推進体制として動き始め、ホールが完成した後に分かれるという考え方や、時期を見て段階的に発展していくことも有り得る。

【鬼木副座長】

- ・連携と言うが、(2)プラットフォーム型について、役所的には連携することが目的になりがちであるが、何のために連携するのか、それによって何をするのかを共有しないとプラットフォームの実質的なものがなくなる。
- ・ビジョンを推進するために必要なA～Iのうち、E(広報活動)、G(調査・評価)、H(市内各団体相互のネットワークのハブ)の実施を前面に出して、まずはプラットフォームを組むという目的をはっきりさせるべき。
- ・将来的にはCの資金的な支援や、プラットフォームに参加する団体が資金をどう配分するかということも扱うかもしれない。
- ・当面はE(広報活動)をやる。共通のキャッチコピーや広報誌、スタンプラリーなどの仕掛けをもった広報活動をプラットフォームで共有したり、何を目的に連携するかということプラットフォームの中で積み上げつつ広げていくのがよいのではないか。

【石田委員】

- ・プラットフォーム型は聞こえはいいが、緩やかな連合組織として危ない面もある。
- ・顔が見える関係の方が、牽引する者が誰であるかわかりやすく、また力が出ると思うので、その役割を例えば市長などがやれるとよい。
- ・国の言うところの連携は、連携という名の補助金削減であるが、そういうことに繋がらないよう前向きな方向で連携してほしい。
- ・コーディネーターについて、資料1の6ページにあるが、専門職を市の中にどう設置するかや、コーディネーターが専門的に活動できる立場をつくってからやり始めないと、本当に優秀な人は来にくい。また専門性というのは演劇の専門家なのか、マネジメント（ホール運営）に関する専門家なのか、さらに、何が小田原にとって一番必要な専門性なのかを考えながらやることが重要である。
- ・コーディネーターの役割が重要なポイントであり、誰にコーディネートしてもらうかが、小田原市の文化政策に直結している。

【神馬委員】

- ・この場合だと、複数の専門家がいると思うので、コーディネーターも複数人になるのか。

【石田委員】

- ・街の規模から考えて1人では無理、複数になるだろう。
- ・理想は様々なバックグラウンドを持っている方がいること。
- ・芸術監督をコーディネーターとするのはどうかという意見があったが、芸術監督の声の大きさに左右されてしまうため、危うい。それよりも、文化政策を全て見ることができる総合的なプロデューサーがいれば（さらにその役を市長がやるのが）一番良い。

【大澤委員】

- ・事務局のことも考えなければならない。ビジョンを発信するための組織をイメージした時、事務局の方、つまり足元を固める（推進する、エンジン）部分に、ジャンルに偏りなく専門性のある人が必要。
- ・芸術分野の専門性よりもマネジメントやコーディネーションの職能としての専門性の方が重要。
- ・音楽、演劇など芸術分野の職能は違うが、それらの経験があって違うジャンルでも言語が通じる人が必要である。
- ・事務局レベルでの専門的な人材で、365日小田原の文化振興の推進を考えられる人、週に1度のボランティアなどではなく、安心して仕事を引き受け、責任を持ってやってもらえる人が少なくとも1人は必要である。

【深野委員】

- ・文化は幅広いので、全てを網羅するには優秀なプロデューサーが必要になる。

【石田委員】

- ・その点については、チームでやってもいいのではないかな。

【深野委員】

- ・先ほど間瀬委員が発言した市民ホールの“創造発信型”とは何かと考えたとき、連携して新しい概念を持ち、小田原という場で小田原の産業や文化活動をする人が集まれば異質の交流が生まれ、新しいものが生まれるという事ではないだろうか。
- ・そのような場が必要なのであり、あくまでもホールは入れものに過ぎない。その中で何をやり、どう連携するのかということ、どういう方向へ持っていくのかが分かる人がプロデューサーとして重要になる。

【間瀬委員】

- ・創造発信型と言ったのは、文化施設の多くが、どこかで創られたものを買ってきて市民に提供するだけという方法を取っているが、そうではなく地元で創ったものを披露するのがこれからの市民ホールの在り方だと考えたため。
- ・人が集まることで、新しい何かを生み出すことが新しいホールの仕事であり、それにはディレクターが必要。そういう意味で、新ホールには創造センターという言葉が出てきている。
- ・新ホールのあり方は、全市的かつ多ジャンルのものをどう結節させて全体でまちづくり

を担っていくのか、である。市民ホールは部分的には担えると思うが、それだけでは足りない。

【露木委員】

- ・異なる分野のものを組み合わせるコーディネーターがいれば、新しいものが生まれ、それが小田原創造となる。

【事務局】

- ・専門家は幅広い視野で全体を見渡す必要があるが、その着眼点・ポイントは、新ホールについていうと、7つ事業展開の基本方針（そだてる、つくる、つたえる、出会う、たのしむ、にぎわう、ひろげる）があるが、専門家がコーディネートしていくベクトルはこの部分でいいのか、意見を聞きたい。

【石田委員】

- ・市として、市民ホールをどうしたいのか、着地点を市民のためにどこに持っていきたいのかということから始まる話になるが、まずは具体的なバックグラウンドを持った専門家がいてそれが全ての基本である。それに加えて市民にどう届けるかというコーディネーターを備えていることが必要である。
- ・その道の専門家であることが明らかに他人にもわかること、ゼネラリストよりもスペシャリストであることが前提として必要になる。一方で、やはり公共的な立場に立つ場合は、ゼネラルな見方ができる人が一番必要である。

【深野委員】

- ・市民ホールの基本計画に、クリエイティブな力と熱意がホールからまちへとあふれる、という基本構想がある。サークルの中にとどまるのではなく、ホールやビジョンからまちにあふれ出るには、スペシャリストの力が必要と考える。

【事務局】

- ・市民ホールの議論の中で高円寺を積極的に事例としている。座・高円寺という劇場は、芸術を使って町おこし・にぎわいを創出する事業を行い、専門性を町に出していくアトバイスしている。新ホールにおいても、ホールの中だけではなくまちに開くということが、新しいホールの形ではないかと考えている。

【鬼木副座長】

- ・専門人材はいろんな分野があるが、特にビジョン全体を推進するための専門家は、音楽や演劇の専門家だけでなく、人と人とをつなぐ専門家、つまりコーディネート専門家の経験がある人が必要である。
- ・施設での事業だけではなく、まちに出ていろいろな思いを持つ人をつなげるためには、まちづくりの専門家のような人が求められるのかもしれない。

【畠山座長】

- ・ビジョンの理念から考えても、小田原が大好きな人が第一ではないか。その次にコーデ

ィネーターや音楽、芸術の専門家が来る。

- ・演劇や音楽の知識がある程度あれば何とかできるが、それよりも人が好きで、人に好かれる人が最低限必要である。

【深野委員】

- ・専門家は深く様々なことを知っている一方で横のつながりがない人が多いため、専門家よりも小田原の顔になるような“一流の人”を据えることが必要なのではないか。

【鬼木副座長】

- ・(資料1の5ページについて) 一度行政で始めたことを、民間主導に移行するのは大変である。
- ・民間側からすれば、行政の都合で押し付けられたという意識で仕事を請け負うので、前向きに取り組めないし、モチベーションの問題もある。
- ・立ち上げから民間も一緒に関わり、行政の役割が段々減少していくようなスタイルができないか。

【大澤委員】

- ・実質的に、推進する担当者の専門性にこだわっているのだが、その人が行政の中にポジションを持つか、行政と共同する相手の中にポジションを持つのか、という違いではないか。

【鬼木副座長】

- ・市民のモチベーションを考えたとき、役所がやっている、ではなく市民が自ら考え自ら推進していくと考えてほしい。行政まかせになりがちだが、行政はサポートや民間ではできないことをやる、という役割に徹したい。
- ・文化振興ビジョンの中で「私たちは」という言い方をしているのは、行政まかせを避けたいから。
- ・行政の中に民間の発想を持った人が来るというだけで、それが担保できるか不安がある。

【事務局】

- ・行政が旗を振るのはよくないが、一緒にやっていくスタンスを設けることと、市民が自分たちでやれるようになったら行政は引くことが必要。
- ・ボランティアや市民の力で動かすのだから、自分たちで実施するように伝えなければならないが、資金面での支援の在り方を明確にする必要がある。
- ・文化振興ビジョンが扱う文化は広いので、市民ホールは文化芸術の中の“創造”の部分を担えばよいのではないか。
- ・色々な分野を結ぶことができる人がプラットフォームにいることが重要である。

【露木委員】

- ・文化、芸術、産業、観光は一体になり得る可能性もあり、協働で行って発展することもある。
- ・分けるところを分け、つなぐところをつなぐことが大切。

【神馬委員】

- ・今言ったことを実施するには、それぞれが何をやっているかを互いに知ることが必要である。

【深野委員】

- ・個々がやっていることがあふれ出さないからつながり合えない。
- ・結節点をどう作るかが必要であり、つなぎ合わせ、結びつけるのは「人」である。

【石田委員】

- ・文化振興ビジョンを担っていく人材は、あらゆるジャンルの専門家である必要があると思う。

【事務局】

- ・芸術文化だけの専門家コーディネーターとして来て、ビジョンのすべてを見るというのは難しい。
- ・行政の中でやっていることを知っていて、さらに役所の中で立ち回ることができる市民ならば、表へ出てきてやってもらってもいい。

【大澤委員】

- ・横浜市の場合は市に鬼木氏がおり、NPO にプラットフォームがあるという両体制でやっているからうまく機能している。機能としては両方必要で、さらに専門人材も必要である。

【鬼木副座長】

- ・行政の窓口は一つでもいいが、行政から参加する 1 人が全市役所の面倒を見ることになる。

【事務局】

- ・行政の中にそのようなポジションを保障するのが必要。数年ごとに異動がある役所において、ビジョンを担い、行政の中で専門家としてやっていく人材を確保しなければならない。

【露木委員】

- ・行政にありがちな縦割りが横につながり、スムーズに物事が進むことが大切である。

【深野委員】

- ・文化は、時間・場所・人・お金を担保しなければならない。

【事務局】

- ・“行政が担う” という表現で、より良い言い回しがあればわかりやすくなる。

【畠山座長】

- ・資料 1 の冒頭で「文化に対する市当局の理解と情熱が必要である」という一文を加えてほしい。

【石田委員】

- ・ビジョンの推進の具体的な行動計画について、作成する可能性はあるのか。

【事務局】

- ・可能性はある。

【石田委員】

- ・行動計画があるとそれが達成されるように動かねばならない。また達成されたかの評価も必要になってくる。

【事務局】

- ・今回の懇話会では提言は求めないが、出された意見を受けて条例化やアクションプランなどの行動計画を検討する。

【大澤委員】

- ・A～I まですべてを一度にできないので、当面は E(広報活動)、G(調査・評価)、H(市内各団体相互のネットワークのハブ)に着手し、その器を作るという話。

【間瀬委員】

- ・逗子市は、文化振興条例を策定した。
- ・首長が変わって政策が変更されると不利益を受けるのは文化を担っている市民である。23 年度の本委員会の時から基本的にはビジョンで行政を縛るのが目的。

【鬼木副座長】

- ・(資料 1 の 5 ページについて) 25 年度中に一部分だけでも始める方が良い。来年 1 年間も話し合うのは長い気がする。

【事務局】

- ・市民ホールの管理運営計画が今年度中にまとまる予定なのでその絡みもあったのだが、必ずしも 26 年度を待つ必要はないため、柔軟に対応していきたい。

【深野委員】

- ・無尽蔵プロジェクトや文化連盟とビジョンに関して、彼らの要望を聞いたり、どのような役割を担うのかなどの摺合せはできているのか。
- ・下調べをした上で、意見を聞くことは必要。

【事務局】

- ・現段階では、無尽蔵プロジェクトも文化連盟も、懇話会の席だけでの話し合いに過ぎない。調査や情報発信という意味では、それらとの意見交換や全体としてどう考えているか、市民や行政がどういう役割をしていくべきかという話し合いを調査という範疇の中できちんとやっていくことが大切と考えている。

【深野委員】

- ・上記のような場があったうえで、25 年度の懇話会を開催しないと、具体化や前進しない。来年度はフェーズを変えてもいいのではないかと。

【大澤委員】

- ・調査をする場合、相手（文化団体等）の要求を聞くというよりも資源を見つけること、

その資源が使えているかを調べることの方が重要である。

【事務局】

- ・芸術文化だけが文化だけではない、様々な人に情報を流すことが重要。
- ・情報発信も一面性だけでなく、ビジョンだからこそ様々な面を発信することが大切。
- ・地元の文化資源の発掘が大切である。

【鬼木副座長】

- ・資源を見つけるということに関して、“この指止まれ方式”はどうか。あるイベントに関して団体に参加を呼びかけるという方法で資源を引出し見つける方法もある。

【間瀬委員】

- ・横浜市山手の外交官の家（エリスマン邸）で数年前に、“この指止まれ方式”で参加団体を集めてイベントを開催し、地元の文化資源の発掘につながった。
- ・岩手県二戸市は、市が地元の文化的資源を活かしたまちづくりをするための条例『宝を生かしたまちづくり条例』を作った。この条例は市民会館ではなく、ビジョンが包括するエリアの文化を担っており、前向きでよい。

【神馬委員】

- ・無尽蔵プロジェクトはうまく使えば大きな資源を持っている。無尽蔵プロジェクトも検証される必要があり、数年後の成果や課題を見たい。